兵庫・屋敷町（やしきまち）遺跡

1 所在地　兵庫県三田市屋敷町・字大池ノ南
2 調査期間　第九次調査　一九九四年（平6）五月～七月
3 発掘機関　三田市教育委員会
4 調査担当者　山崎敏昭・新竹由美
5 遺跡の種類　古代寺院跡・武家屋敷跡
6 遺跡の年代　奈良時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

屋敷町遺跡は、武庫川中・上流部の右岸、三田盆地の三田側南部に位置する。川床との比高差約一五mの河岸段丘（西山―屋敷町台地）の突端部に立地し、三田市屋敷町全域及び字大池ノ南の一部を遺跡範囲としている。

（三　田）

屋敷町遺跡は、一九九七年度までに行なわれた二六次にわたる発掘調査により、古代から近世にかけての集落遺跡であることが明らかになってきた。その中でも三田藩の家臣団の居住地として成立した近世の武家屋敷群が広範囲を占める。

既往の発掘調査で検出した主な遺構としては、平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物群、室町時代後半の土坑群や寺院に伴う堀状遺構、江戸時代の武家屋敷跡に伴うトイレ・池などの遺構群や基壇状遺構などがある。

木簡が出土した第九次調査区は、宝永年間（一七〇四～一七一一）の絵図（宝永年間以降の三点の絵図もしくはその写しが現存する）と照合すると、「九鬼与五左衛門」「和久山治朗左衛門」など計五軒の武家屋敷跡と推定され、検出した近世の遺構群はこれらの武家屋敷の遺構と考えられる。

この調査で出土した遺構については、面的な変遷を辿ることができる。武家屋敷は当初は調査区の東側のみであったが、後に調査区中央に道路状遺構と側溝が新たに付加され、西側にも屋敷地が新設される。その時期は絵図により宝永年間であったことがわかる（『摂州三田絵図』〈元禄元年戊辰年三田藩屋敷之図　個人蔵〉と『三田絵図』〈宝永頃　個人蔵〉との比較による）。

木簡は、宝永年間以降に新設された西側の屋敷地に位置する土坑SX一から一点出土した。この土坑は平面形は南東隅・南西隅をコーナーとする北に開いたコの字形を呈する遺構で、東西四・五m、南北一・七m、深さ一五～二〇cmを測る。南北両岸は木材により護

岸されており、当初は水溜として機能し、廃絶後に陶磁器類などを投棄するための土坑として利用されたと考えられる。この土坑の埋土は一層であり、同層からの木簡以外の出土遺物には、肥前、瀬戸・美濃、三田焼磁器椀・皿、木製品、ガラス瓶、眼鏡レンズ、革靴などがある。これらの製作年代は、一八世紀～近代までの時期幅を示し、この年代の下限からみて、出土した木簡も近代以後に廃棄されたと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

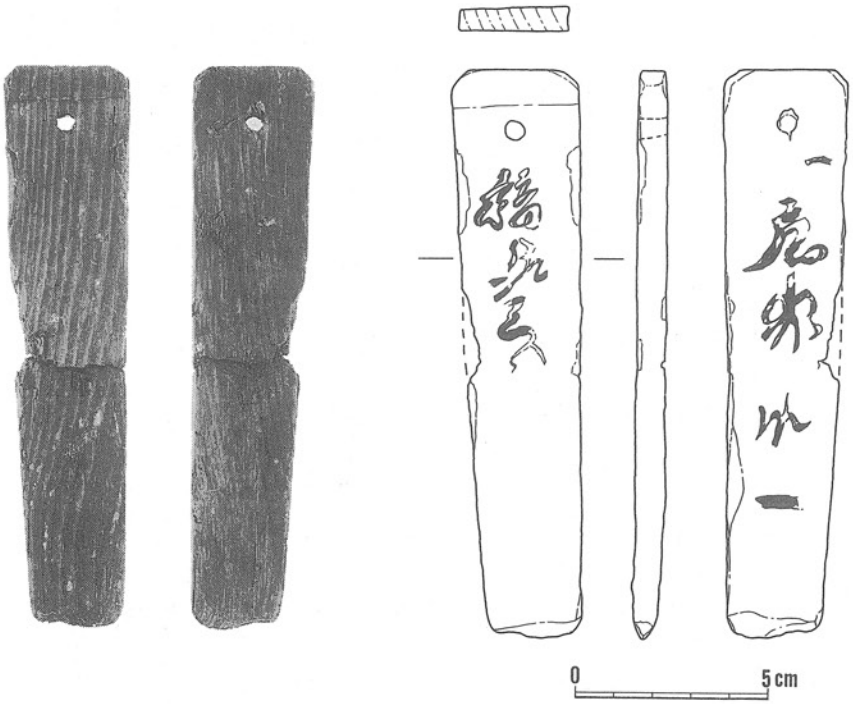
(1)　・「○□九鬼水□」

・「○福□□□」　150×33×8　011

現状では二片に分かれているが、これは廃棄時の二次的な切断であると考えられる。

木簡にみえる「九鬼」は出土場所との関係が深い。この木簡が出土したSX一が所在する屋敷地は、宝永年間以降の三点の絵図の写しによると、「九鬼与五左衛門」「九鬼金左衛門」「九鬼寅太郎」の三人の九鬼姓を名乗る家臣の屋敷であった。木簡の記載も、この屋敷地の主に関連するものであろう。

9　関係文献

三田市教育委員会『屋敷町遺跡―三田市営大池団地改築に伴う屋敷町遺跡第九次発掘調査報告書―』（一九九五年）

（新竹由美）